日の友

423号

令和３年７月

日本銀行退職者の会（旧友会）
会報『日の友』四二三号、二〇二一年七月。

ノーベル賞を二人生み出した国際セミナー

岡部光明

今から10年ほど前、私が母行を退任して大学教員をしていたころ、自分が担当するゼミナールの学生諸君に尋ねてみました。「この写真（次ページ参照）で立っているのは私ですが、私の前にいるひげをはやした方は誰だか分かりますか？」と。すると「それはスティグリッツさんではありませんか」とある女子学生がすかさず答えてくれました。「ピンポーン（正解）」。確かに、この方はノーベル経済学賞を受賞したジョゼフ・スティグリッツ氏（米コロンビア大学）です。同氏は、タイム誌で「世界中で最も影響力のある100人」に選ばれたように、日本の新聞でもその顔写真が頻繁に掲載されるので推測できたのでしょう。但し、この写真でみる同氏も私も、ともに36年前の姿です。

当時、私は金融研究所に調査役として在籍しており、これはフランスで行われた国際セミナーに参加した時の思い出深い写真です。

フランスの古城でのセミナー

参加したそのセミナーは、比較的新しく立ち上げられた「マクロ経済学国際セミナー」（ＩＳＯＭ）という研究会でした。発足後８年目の会合でしたが、母行から参加するのは私が初めてでした。また私にとっても、それまでに参加した国内外の研究会に比べて、ユニークだと感じた点が幾つかありました。

第一に、欧州と北米の両方からいずれもトップ級の参加者が出席した研究会であったことです。第二に「セミナー」という名称が示唆するとおり、参加者は30人程度に限定され、マイクロフォンなしで緊密な討議をする場だったことです。そして第三に、会場は何と15世紀に建築されたラニー城という歴史的な館だったことです。その館の所有者は何とフランス銀行（中央銀行）であり、同行が会議センターとして所有していたものをセミナー会場として提供していたわけです。

何分、昔のことなので細かい記憶は薄れており、また参加者リストも廃棄してしまっているので、今回この随想を執筆するに際して当時の日記を紐解いてみました。すると、討議内容の具体的な記載はなく「セミナーでは高度のディスカッションが中心だった」とか「料理、チーズ、そしてワインがすばらしかった」などと記載している程度でした。なお、このセミナーが現在でも継続して開催されているのかどうかをインターネットで調べると、確かに当初のスタイル（とくに参加者を少人数に絞ること）を厳格に継承するとともに、毎回欧州のいずれかの国で行われていること、そして昨年は第43回目にもなるが従来通り開催されたこと（但しコロナ禍ゆえオンライン開催となった）などが分かりました。

この会議の16年後にノーベル賞―スティグリッツ氏

下段の写真は、このセミナー（１９８５年６月24日）終了後の夕食会でのスナップショットであり、オーストラリアから出席していたマックス・コーデン教

1985年６月24日　マクロ経済学国際セミナーの夕食会でのひとコマ
（後列が筆者、筆者の前がスティグリッツ氏）

授が気をきかせて撮ってくれたものです。「ミスター・オカベ、あそこにいるスティグリッツさんは将来きっとノーベル賞を受賞するから、今あなたと一緒にいる写真を撮ってあげよう」といわれ、そのアドバイスに従ったわけです。

スティグリッツ氏（当時カリフォルニア大学）は、情報の非対称性の下での市場機能について論文を発表していることを、当時私も知っていました。ただ、その研究は経済取引には色々な見方があることを示す一例だという程度の理解でした。しかし、このセミナーから16年経過した後ですが、同氏は２００１年にノーベル賞を受賞されたのです。

写真を撮ってくれたコーデン氏の慧眼に脱帽しています。なお、私はその後もコーデン氏と親しくしており、海外における各種研究会（ワシントン、ボストン、キャンベラなど）で頻繁に顔を合わせる機会がありました。また同氏による教科書「国際マクロ経済学」を邦訳出版するという展開もありました。

33年後にはノードハウス氏も受賞

スティグリッツ氏の受賞からさらに17年も後になりますが、今度はあの時のセミナー参加者だったウイリアム・ノードハウス教授（米イエール大学）も、２０１８年にノーベル賞を受賞されました。同氏の受賞は、二つの点で私にとって驚きでした。

先ず、あのセミナー本番での席順はアルファベット順だったので、私は同氏と隣り合わせの席で参加していたことを鮮明に記憶していたからです。当日は、隣席のよしみで多少会話を交わした程度に過ぎませんでしたが…。もう一つは、同氏の受賞理由が「気候変動と長期的なマクロ経済活動の分析を統合した貢献」だったことです。セミナー当時までの同氏の研究は、マクロ経済学が従来から中心としてきた幾つかの領域でしたが、そこに気候変動が加わっていたのが意外だったのです。しかし、あのセミナーから33年も経過すれば、研究の重点が相当変化するのも自然なことである（そしてそれが評価されるケースも当然ある）と納得した次第です。現に気候変動に関する同氏の研究の大半は、あのセミナー以降に発表されています。

自分がかつて参加した小規模研究会のメンバーが２人もノーベル賞に浴するとは、なんと愉快なことでしょうか。なお、上記セミナーでは、金融政策についてもパネルディスカッションがありました。当時は、中央銀行の政策運営目標としては金利でなく通貨供給量あるいは名目ＧＮＰに切り替えるべきではないか、という議論が世界中で活発に行われていました。私は、主催者から事前に要請を受けていたので日本銀行の複眼的な運営方式を発表しました。その発表は、主催者の一人であったロバート・ゴードン教授（米ノースウエスタン大学）の名目ＧＮＰターゲット方式の提案などとともに、後日ある専門誌に掲載されました。

人間性を取り込んだ経済学へ

ところで私は、母行を退任してから大学で金融論、マクロ経済学、日本経済論などの授業を担当してきました。しかし、大学在任時の後半から定年退職後の現在までの約15年間はそうした研究と決別し、新しい視点の研究へと路線変更をしています。

これまでの主流派経済学では、人間は自己の効用を利己的・合理的に追求する原子論的な存在という人間像が前提とされています。そして、それは厳密な（数理的）論理展開を容易にし、大きな成果を挙げてきています。

しかし、その場合の政策論は、市場競争第一主義あるいは新自由主義に傾きがちです。もともと人間には、利己心だけでなく、利他心、コミュニティ感覚、絆ないしネットワーク性もあるので、それらを取り込んだ経済学が必要ではないか、というのが近年の私の問題意識です。そうした研究を２０１７年に「人間性と経済学」という書物で公刊したところ（注）、幸い日本経済新聞で取り上げてもらうことができました。現在は、それをさらに発展させた研究を取りまとめて新しい本を刊行すべく、取り組んでいるところです。

（注）http://www.okabem.com/book/ningensei.html